

# 紙芝居上演の心理学的研究の構想

柳 田 多 聞

The Concept of the Psychological Study on the Performance of Kamishibai

Tamon YANAGIDA

## Abstract :

There have been many studies on Kamishibai from historical or cultural viewpoint. But so far few studies have been aimed at the behavior of performing Kamishibai. This paper propose a concept of the psychological study on the behaviors concerning the performance of Kamishibai. It is argued that the performance of Kamishibai has many problems to be studied in many field of psychology: cognitive, educational, social, and healthy psychology.

## Keywords :

Kamishibai, performance, presentation, skill development, communication, mental health

### 1. はじめに

本研究は、紙芝居の「上演」に関して、心理学的な観点からいかなる研究がなされうるか、その必要性や可能性を論じるものである。まず、紙芝居に関する研究全体を眺めてみることから始めよう。

#### 1.1. 紙芝居研究の現状

紙芝居は日本生まれのメディア・コミュニケーションであり、昭和初期に現在の形式が確立され、第二次世界大戦の前後にかけて波乱万丈の歴史を辿ってきた(上地, 1997; 鈴木, 2005)。戦後はテレビの普及に伴ってブームは衰え、昭和の後半からは児童文化の一部として位置付けられることが多かったが、近年、その独特な双方向的コミュニケーション特性が再評価されるようになり(まつい, 1998; 鈴木, 2005)、医療や介護など各方面で注目を浴びつつある(濱・小林・武藤, 2002; 遠山, 2006)。

紙芝居に関する学術的研究は、文学、児童文化、社会学の分野において多数あるが、それらは、紙芝居作品の題材の変遷や、紙芝居が社会へ及ぼす影響の変遷に関する文化研究的観点からの研究が主である(上地, 1997; 山本, 2000; 鈴木, 2005, 2009; 姜, 2007; 石山, 2008)。一方、紙芝居を演じる行為、すなわち「紙芝居上演」を題材とした研究はほとんどみられない。その中で、まつい(1998)は、紙芝居の上演における「演者と観客との相互作用」に着目し、紙芝居というメディア形式が、他に類を見ない独特な双方向的コミュニケーション特性を有していることに重点を置いて論じた画期的な紙芝居論である。ただし、これは実証研究ではなく、紙芝居作家としての卓越した考察の結実である。

紙芝居は、紙面に描かれた絵を観客に見せながら、演者が脚本を読み語る上演行為(パフォーマンス)であり、紙面に記録された絵

と脚本のみでは成立しないメディアである。同じ作品であっても、演者が違えば、観客が抱く印象や伝達される意味は異なる可能性が大きく、演者が寄与する役割は大きい。

したがって、紙芝居というパフォーマンスの成立や様態に大きく関与する「上演行為」に焦点を当てた詳細な研究が必要である。

## 1.2. 紙芝居上演研究とは

紙芝居の作品内容や、文化活動としての紙芝居に焦点を当てる研究ではなく、紙芝居の上演という行為に焦点を当てる研究は、主に2つの学問領域の対象になりうるだろう。1つは文化研究(カルチュラル・スタディーズ)の一領域としての「パフォーマンス研究」であり、もう1つは行動の科学としての「心理学」である。

パフォーマンス研究では、演者が観客を前にして紙芝居作品を上演するという形態の社会的活動に対して、その文化研究的な観点から見た特質ならびに、社会や文化に及ぼす影響に焦点を当てた研究がなされうるだろう。

心理学では、紙芝居上演に関わる人(演者と観客)の行動に対して、その心理学的な観点から見た特質や、それが人々に及ぼす心理的影響に焦点を当てた研究がなされうるだろう。

本稿では、筆者が専門とする心理学の観点から紙芝居上演に関してなされる研究とはいかなるものとなりうるか、に焦点を絞り、以下に詳しく見ていくこととする。

## 2. 紙芝居上演の心理学的研究の目的

まず初めに強調しておきたいが、紙芝居上演の心理学的研究の目的は、「紙芝居の良い上演とは何か」の答を求めることではない。研究の過程において、上演の方法を具体的に検討することになるが、最良の上演という名の特定の行動様式を探究することを目標にはしない。たとえば、ある特定の作品の上演について考えるときでも、そこに最良の演じ方がただ一つあると考えてしまえば、紙芝居の

魅力が失せてしまうからだ。その理由について、以下に、紙芝居という形態の活動の本質を再検討しながら、考察していこう。

紙芝居上演とは、脚本家と画家が作り上げた作品世界を、演者が自分なりに解釈し、自分の身体と声を用いて、観客と対面してリアルタイムに会話を交わしながら上演する、という形式をとる。その一連の行為全体を指してはじめて「紙芝居上演」と呼ぶことができる。

この中には確定要素と不確定要素がある。確定しているのは印刷されてある脚本と絵である。脚本家の思いと画家の思いは、作品の紙上に固定されている。しかし、その他の要素、すなわち演者と観客は不確定要素である。さまざまな人物が演者になりうるし、様々な人物が観客集団を構成する。人数、年齢、個性、関心が、上演の機会ごとにさまざまに異なる集団でありうる。上演の時期・季節や場所、上演の名目も、上演の性格に影響を及ぼす。これら数多くの不確定要素を含む紙芝居上演において、唯一の最良のあり方を求めることは、非現実的であり、非建設的である。

むしろ、さまざまに異なる個性を持つ演者が、さまざまに異なる個性を持つ観客との出会いに際して、当該の上演機会ならではのコミュニケーションを育む心がけて演じることが、紙芝居ならではの豊かなコミュニケーション創造の効果を引き出す鍵となる、と考えるべきではないだろうか。

ただし、だからこそ、良い上演と悪い上演とは厳然として存在しうる。恐らくそれは、一つひとつ個性を持った上演ごとに生まれうるコミュニケーションについて、演者が深く考えるか否か、に依拠するものであろう。これを考えるための指針として、紙芝居の上演というものが、いかなる特質を有している行動・現象であるのか、を明らかにする必要がある。

つまり、紙芝居上演の心理学的研究の目的は、紙芝居の上演にまつわる行動や現象とは、いかなる心理学的特質を含むものであるのか

を明らかにし、その特質が生じる理由を明らかにすることである。その理由を演者が理解し、配慮をしながら上演に臨めば、自分なりの、また、その上演会の観客ならではの、豊かなコミュニケーションを創造するヒントとなりうるからである。また、紙芝居上演の特質から見出される応用可能性を探ることも、研究の重要な目的と言える。

### 3．紙芝居上演の心理学的研究の諸課題

紙芝居の上演行動が持つ特質は、心理学のいくつかの領域の観点から、いくつも見出すことができる。そのわけは、紙芝居を上演するという行為が、複雑な要素から形作られているからである。したがって、その様々な特質に対するさまざまな観点からのさまざまなアプローチが可能になる。

この節では、紙芝居上演の特質を大まかに分類しながら、それぞれに対応する心理学の領域を挙げて、それぞれにどのような研究課題が見いだせるかを考察する。

#### 3.1．認知心理学的研究

紙芝居上演は、「見せる」行為であり、かつ、「聞かせる（語る）」行為である。観客側は、「視覚」と「聴覚」という異なる感覚を通じて、演者が提供する情報を取り入れる多重課題の遂行を要求されることになる。演者の上演行為の良し悪しは、言わば、このような観客の課題遂行を支援する配慮があるかどうかによって依拠する部分がある。これらの観点に関する心理学領域は「認知心理学」である。

##### 3.1.1．プレゼンテーションと注意喚起

紙芝居におけるプレゼンテーションは、視覚と聴覚を通じて直接的に対面してもらえられる形態をとる。

観客が「見る」主な対象は、紙芝居作品の「絵」である。紙芝居の絵は静止画であるが、「舞台」と呼ばれる木枠の中に収められた絵が、演者によって1枚1枚引き抜かれ、下に隠れていた絵が少しずつ現れていく、という

動的変化がそこに存在する。さらに、演者自身の「表情」や「身体」も、観客が「見る」対象物となる。これもまた、動的変化を持つ対象である。

観客が「聞く」対象は、演者が話す声であるが、これにも、抑揚や大小の変化、いわゆる「間」と呼ばれる空白時間、口調の変化といった、動的変化が存在する。

動的対象が複数存在することから、観客の「注意」がどのように変化するか、という認知心理学的問題が生じてくる。

この「注意」の問題に関して、紙芝居上演の実践に深く関わっている人々は、その経験から上演における「舞台」の存在価値を強調する（まつい、2006）。紙芝居において「舞台」とは、重ねた絵を収納する木枠の箱のことを指す。まつい（2006）は特に、三面開きの扉が付いた舞台が観客の注意を惹きつける効果、現実世界から物語世界への移行に誘う効果を強調する。

ただし、この効果について客観的に実証することは容易ではない。例えば、観客の紙芝居観賞中の眼球運動を測定することであれば、それは不可能ではない。舞台が設置される際、舞台に紙芝居作品が収められる際、扉が1枚ずつ開かれていく際、物語が始まり画面が1枚ずつ引き抜かれては奥に差し込まれる際、演者が画面を覗き込み、観客に呼びかける際など、観客の視線がどのように移動するかを記録することは可能だ。しかし、眼球の移動と、注意・関心とは同一ではない。観客の関心の的は、必ずしも中心視の在り処だとは限らない。仮に眼球運動と注意・関心との間に高い相関があったとしても、それは関心そのものの記録ではない。主観的な関心を捉えるための方策を講じる大きな課題が残されている。

##### 3.1.2．感情の伝達および認知

観客の最終的な認知対象は、「物語」であり、そこには登場人物が経験する様々な感情の起伏が存在する。したがって、それは感情

的な意味内容だと言える。これを観客に伝達し認識してもらう紙芝居上演には、「感情の伝達および認知」という重要な認知心理学のテーマがある。

柳田(2010)は、紙芝居の上演が観客にもたらす強い「感情的同調」や「感情移入」の効果を指摘した。ただし、それは全ての観客に遍及ばされるような、まるで洗脳的な性質のものではなく、観客個人個人の感受性を反映した形での反応だと思われる。そこには大きな個人差があるため、観客集団を対象にした測定・記録では、焦点がぼやけてしまうことが予想される。個人を対象とした、質的かつ縦断的な観察記録が相応しいと考えられる。

### 3.1.3. 視覚聴覚の情報統合

紙芝居上演は視聴覚を通じた情報伝達である。観客にとってそれは二重の認知課題ではあるが、それは対立し干渉し合う課題ではなく、視覚と聴覚の情報が互いの理解を助けあう相補的な関係であることが予想され、場合によっては相乗効果も期待できると思われる。

その際、絵の方は固定した静止画であるが、声の方は演者がリアルタイムに制御すべき対象である。したがって、よりよい相乗効果を期待するためには、演者は自分の語りをどのように制御すればよいか、その指針が欲しいと感じるのは当然である。

落語・講談・浪曲といった伝統的な語り芸や、ストーリーテリング(素話)など、語りを含むパフォーマンスは様々ある。これらは、聴覚情報のみでの伝達である。それに対して、絵本を見せながら語る場合と紙芝居は、視覚情報を提示しながらの聴覚情報提示である。この両者の特質の違いについての科学的な探究が今後期待される。

## 3.2. 教育心理学的研究

紙芝居の上演というものは、練習が必要な複雑な行為であり、次第に変容し上達してい

く「技能 skill」である。「技能の習得 skill development」という問題は、「教育心理学」の大きなテーマであり、紙芝居の上演は格好の題材となりうる。

### 3.2.1. 上演における動作技能

紙芝居の上演において、演者が行う動作は、「見る」「話す」「(絵を)抜き差しする」そして「顔の表情」である。これら一つひとつは、誰でも日常行っている簡単な動作である。しかし、「見る」「話す」「抜き差しする」「表情」それぞれの中にさまざまなバリエーションが存在する。紙芝居上演に際し、演者はそのバリエーションの中からどれを今実行すべきかの選択を迫られる。

「見る」対象には、絵の裏に書かれている「脚本」、「観客たち」、そして「舞台の中の絵」がある。それぞれの対象を「いつ、どういったタイミングで」見るべきなのか、演者は思案しなければならない。

「話す」際に考慮すべきことには、声の大きさや高さとその変化(抑揚)、話す速さと「間(ま)」そして声の表情(感情表現)がある。脚本中のどの言葉をどのように話すべきなのか、演者は思案しなければならない。また、脚本にないセリフ、すなわち、観客との当意即妙の会話については、あらかじめ決めておくことはできないので、その都度、瞬時に判断しなければならない。

「絵の抜き差し」については、脚本中に「さっとぬく」「ゆっくりぬく」「半分までぬく、のこりをぬく」などの指示がある場合がある。しかし、これらの指示もあくまで漠然とした指示であって、「さっと」とはどの程度のスピードか、「ゆっくり」とはどの程度なのか、演者は思案しなければならない。

「顔の表情」は、半ば反射的な感情の表出である。物語の進行にともなう登場人物の心情の移り変わりや場面自体の意味を観客が読み取る上で、演者の表情はひとつの重要な手がかりとなりうる。どの場面でもどのような表情が、観客の助けになるのか、演者は思案し

なければならない。

実は、紙芝居を演じる行為は、実にさまざまな選択を求められる複雑な作業なのである。

### 3.2.2. 上演技能の習得

上記した紙芝居上演の動作は、日常生活動作の一部とも言える、ごく自然な動作であり、それら単独の遂行には特別な訓練を必要としない。これまでの生活を通じて、繰り返し強化されながら獲得してきた「手続き記憶」として、ただ呼び出して実行するに過ぎないからだ。

しかし、別の見方をすると、そういった慣れきった日常動作を、特定の目的を踏まえて、いつもとは異なる形で遂行しようとする、それは非常に困難な課題となる。手続き記憶的な動作は、無意識的、自動的に遂行してしまう動作だからだ。

それを目的の形に修正する作業が「練習・訓練」である。それには一定の時間や手間が必要となり、徐々に変化する過程を経て、技能は習得されていく。紙芝居上演に関する教育心理学的研究が焦点を当てるポイントはここにある。

紙芝居の演者が、練習や考察を重ねていくにつれて、どのように上演技能を変化させていくのか、何がどのような刺激になって、そういった無意識的な動作が変化していくのか、また、そのような無意識的動作の意識化が演者自身にどのような影響を及ぼすのか、などは、教育心理学上の興味深い題材だとと言える。

そしてもう一つ、教育心理学的な観点で焦点を当てるべき題材として、熟練した演者から未習熟の学習者へ、技能の伝達が可能かどうか、どのようになされるのか、というテーマがある。

「技の伝承」に関しては、伝統技能の分野において、エスノグラフィーの手法を活かした観察記録研究がみられるが(例えば、西郷、1995)、まだ、歴史の浅い紙芝居では、その

格好の観察対象者が見だしにくい。技能をどのように伝承するか模索が必要な段階だと言えよう。

### 3.3. 社会心理学的研究

紙芝居上演は、観客という他者を対象としてなされる行為であり、社会的行動の一つであるという側面を持つ。そこには、意識的・無意識的なコミュニケーションが生起しており、そこに社会集団行動としての独特の特性が見られる。これらの観点に関する心理学領域は「社会心理学」である。

#### 3.3.1. 上演におけるコミュニケーション

紙芝居作品は、複数の観客、すなわち集団を想定して製作されている。演者が、観客集団に向けて作品を演じる際のコミュニケーション形態は、演者から観客集団への「一対多」の形態をとるが、いわゆるマスコミとしての「放送」や「出版」とは違って一方向伝達ではない。つまり、情報の送信者である演者が目の前にいて、それと同時に上演を楽しんでいる観客仲間がすぐそばにいる紙芝居上演では、その最中に「観客から演者への発言」や「観客同士の発言」が発生するのが自然である。そこには、さまざまな形の双方向伝達のコミュニケーションが発生する。

そういったコミュニケーションから、他者への信頼ならびに自己への信頼、観客集団への帰属意識や集団凝集性の向上に影響を及ぼす可能性が考えられる。そういった問題を取り上げるのが社会心理学的研究である。

幼児教育と老人福祉の両方の現場に携わってきた石井(2006)は、幼児にとって紙芝居とは「みんなと一緒に見て、聞いて、感じて、感じたことを言葉に表すことのできるツールであり活動(石井、2006、p.129)」であり、紙芝居の上演は幼児の社会性を育むと指摘する。

この指摘はうなずけるものであるが、その具体的なプロセスの詳細については不明な部分が多く、今後、エスノグラフィックな観察

記録が数多く蓄積され、社会性の獲得に紙芝居がどのように関与するかを明らかにしていく余地が多く残されている。

### 3.3.2. 演者行動がもつ効果

ただし、上演中の観客発言の許容や受容のあり方は、演者の意識次第であり、紙芝居の歴史を振り返れば、それらを良しとしない時代もあった。

例えばその典型は、第二次世界大戦中の「国策紙芝居」の上演である。この時代、紙芝居は「国策の周知宣伝、国民精神の総動員という目的のため(中略)上意下達、教化、思想注入という指導者の意図に「きわめて適切な」メディア」(鈴木, 2005, p.62)と見なされていた。

この時代に良しとされていた演じ方は、「紙芝居の小さい窓に全注意を集注させて、(中略)実演者は舞台の裏にすっきり姿をかくすのがよい」(上地, 1997, p.74)とされていた。この上演スタイルは、演者と観客との自由なコミュニケーションを完全に抑圧する方法と見なすことができよう。

そういった歴史の反省の下に、現代の紙芝居上演のあり方やその意義が問われている訳であるが、そういった文化研究的な考察とともに、紙芝居の上演によって繰り広げられるコミュニケーションが、どのような条件によって活性化するのか、特に、演者の振り舞い方が及ぼす効果についての社会心理学的研究への期待は大きい。

## 3.4. 健康心理学的研究

健康心理学とは、心身の健康に関する問題に心理学的観点からアプローチする、心理学の応用分野である

### 3.4.1. 紙芝居という場がもたらす癒し

前節でも触れたが、紙芝居上演の場では、観客は自由な発言が許容・受容される。観客からの発言を分類すれば、演者の要求による「掛け声」、演者からの問いかけに対す

る「返答」、観客の自由な感想や疑問、観客同士の会話、がある。

そこには、独り言のようなつぶやきや隣の観客とのひそひそ話のような小さな声もあれば、思わず飛び出た歓声や口を突いて出た感想や感慨、問いたださずにはおれない疑問、観客みんなで声を揃えての掛け声といった大きな声まで、さまざまな発言がある。大切なことは、そういった様々な、自発的で自由な発話行為を、抑制しない場が、紙芝居上演の場である、ということだ。

前述した石井(2006)は、自分の思いを自由に表現できる紙芝居の場を体験することを通して、幼児が「自分の居場所」を実感することができる、と述べている。

この指摘は、観客が紙芝居上演の機会に、自分がありのままに受け容れられる実感を得て、自己と他者との安心した関係を育む機会を持ち、心の安定を得ることを意味する。他者との豊かなコミュニケーションを実感する体験は、心の健康に大きく寄与することが予想される。

いわゆる「癒し」に対する紙芝居の効果は、幼児だけに限られるものではなく、あらゆる世代に対する心の癒しをもたらす可能性がある。濱・小林・武藤(2002)は、介護施設に入所している高齢者に対して紙芝居上演を続けていくうちに、QOLが上昇したことを報告した。また、柳田(2010)は障害児のデイサービスへの紙芝居上演を通じて、紙芝居を楽しむ場が、心身に障害を抱えた人々に対して、豊かなコミュニケーション行動をうながす機会となっていることを報告した。

### 3.4.2. 演者にもたらされる癒し

また、紙芝居上演がもたらす健康的な効果として、観客が受ける効果のみならず、演者自身に対してもたらされる効果にも注目したい。なぜなら、紙芝居のコミュニケーションは双方向的であるし、これは筆者自身の体験からの感想であるが、演者自身がコミュニケーションについて、上演に関わる以前より

もはるかに多く考慮するようになるからだ。

演者は、観客を前にして上演に臨む前に、紙芝居作品の「下読み」という作業で、作品の内容を深く理解する必要に迫られる。そうしなければ、具体的にどのような上演動作をするべきか、決定できないからだ。この下読み作業は、作品の作者である脚本家と画家の思いや願いを汲み取ろうとする作業である。それは言い換えれば、直接には対面して会話を交わせない脚本家や画家と、作品に表現された内容を通じてコミュニケーションを図ろうとする試みだと言える。

しかし、そのような意図が背景にあるとしても、現実には演者自身が自分の経験や知識を通して、作者の思いを解釈しようと試みる作業である。この作業を通じて、演者が行うことは、「自分はこの絵や、この言葉に対して、どういう意味を見いだすのか」を深く考える作業であり、それは言わば「自己内対話」である。それは、自己理解をうながし、自己の再発見へと通じる。

演者がこの作業を行うことは、自浄作用を持つ可能性を指摘したい。作者が「人生や生きることについての深い意味や価値(まつい, 1998)」について思いを込めた作品であれば、それと真摯に向き合い、その中に演者自身が意味を見出そうとする作業は、演者自身を癒す効果を持つと考えることができるからだ。

この効果についての実証研究も、個人の主観的経験について深くインタビューする手法によって、そのプロセスのキーワードを収集する方法が相応しいと考えられる。いずれにしても、長い期間、上演経験を重ねた演者が対象となる必要があり、息の長い研究が必要となる。

#### 4. おわりに

以上、紙芝居の上演にまつわる行動に対して、心理学の諸領域からさまざまな観点でなす研究のあり方について、概観してきた。

紙芝居上演は、複数の人々から構成され、複数の動作・行動から構成され、さまざまな

影響を及ぼしうるものであることが分かる。主観的で個人的な体験から構成される紙芝居体験の、特質や理由群を丁寧に解きほぐしていく作業は、根気や手間の必要な作業であることが予想される。しかし、明確な形に表しにくい心情について、理解しうる形への表現を模索する作業は、まさに心理学的な探究そのものと言えるかもしれない。そういう意味でも、紙芝居の上演は興味深い心理学の題材であると言える。

#### 引用文献

- 石山幸弘(2008) 紙芝居文化史 資料で読み解く紙芝居の歴史, 萌文書林
- 姜竣(2007) 紙芝居と「不気味なもの」たちの近代, 青弓社
- 濱耕子・小林美智子・武藤慶子(2002) 紙芝居とQOL - 施設入所中の高齢者のQOLに与える紙芝居の効果, 本学「共同教育研究費」に係る研究報告書, pp.157-164
- 石井良信(2006) 子ども向けから老人向けへの実践 遠山昭雄(監修) はじめよう老人ケアに紙芝居 観ること, つくること, 演じることの楽しみ, 雲母書房, pp.128-137.
- 上地ちづ子(1997) 紙芝居の歴史(日本児童文化史叢書), 久山社
- まついのりこ(1998) 紙芝居 共感のよろこび, 童心社
- まついのりこ(2006) 紙芝居の演じ方 Q&A, 童心社
- 西郷由布子(1995) 芸能を身につける: 山伏神楽の習得過程 福島真人(編) 身体の構築学, ひつじ書房, pp.101-141.
- 鈴木常勝(2005) メディアとしての紙芝居(日本児童文化史叢書), 久山社
- 鈴木常勝(2009) 戦争の時代ですよ! 若者たちと見る国策紙芝居の世界, 大修館書店
- 遠山昭雄(監修)(2006) はじめよう老人ケアに紙芝居 観ること, つくること, 演じることの楽しみ, 雲母書房
- 山本武利(2000) 紙芝居 街角のメディ

ア(歴史文化ライブラリー), 吉川弘文館  
柳田多聞(2010) 紙芝居にみられる観客  
のコミュニケーション行動, 2010年日本社会

情報学会(JASI & JSIS)合同大会研究発表  
論文集, pp.82-85